

二 人物伝あれこれ

三日留守をして独り帰宅し少し疲れの残る晩に、BS放送でイギリスBBCフィルムズの映画を観た。寝入るまで印象を留めるほど、見ごたえのある作品だった。

日本語の題名が「リトル・ダンサー」。ボクシングを習っていた少年が、同じ練習場で見たダンスに興味を示すと、ダンス教師がその才能を見抜いて手ほどきをし、少年は伝統あるバレエ学院に入学して優れたダンサーに成長する、という物語である。映画は、その成功物語を、登場人物たちが置かれた状況に立ち向かう中で描き、厚みと陰影のあるドラマにしている。時代はサッチャー政権の一九八四年。炭鉱の町で、炭鉱労働者の組合がストライキをして警察隊と対峙している。少年の父はその炭鉱労働者である。つましい生活の中で息子にボクシングを習わせたのは、身を立てるのに役立つかも知れないと考えてのこと。それなのにひそかにダンスを練習する息子を父は許さない。ところが、中流階層だが夫が失業中のダンス教師は、自身の問題を引きずりながらも、少年の才能を開花させようとする。ついに父親は、息子に才能があるという言葉に賭ける。息子をロンドンに行かせるお金をつくるために、あわやスト破りをしようとしてまで。少年も自分の社会的な

位置を知っている。このときの少年俳優のひきしまった顔は威厳があった。主演賞をもらったというのがうなずける。

長々と筋を追ったのは、ドラマが薄っぺらな物語ではないことを言いたかったからである。前回話題にしたように日本のテレビ・ドラマをおもしろく思わないから、たまに優れた外国映画を観ると感動するのである。あるいは、単にドラマ作りの問題だけではないのかも知れない。「リトル・ダンサー」を印象深く感じたのは、日本の社会とそこでの人間の行動がヨーロッパと違っていいからではないか、とも思う。人間が強靱で信念ある行動をする、少年でさえ。自分をふり返って最も足りないところだ。そういうところに感動するからには、自己を確立して保つことは人間一般が見習うべき美徳なのだと思う。疲れていたわたしの目を覚ましてくれる映画だった。

その映画を観てからほどなく、M・サッチャー元首相が亡くなった、という報道に接した。イギリスでは在職中の施政への評価の一方で批判もあるらしい。そのことがちょうど読んでいたプルタルコス『列伝』に対する感想と結びついて、われわれ日本人の人物評価のあいまいさへ思索を導いた。

人間の徳を追求するプルタルコスは、その伝記集で、できるだけ公平な立場に立つて批

判的に、高名な人物たちの行動の「功と罪」を淡々と述べる。一人の人間の中に徳だけでなく不徳もあることを見ようとするのである。その『列伝』を読んだ西洋の人々に、人間を厚みのある多面的な者として見る眼を養ったに違いない。対比して自然に、司馬遷の『史記列伝』に思いが向かう。ここでは、各々の人物は別々に切りとられて伝記的に記述されるのだけれど、よく構成されたドラマの登場人物のように、人間がさまざまな個性の典型例として描かれる。この書きぶりは、中国の伝承で人間を語るときに、一人の人間の複雑さにあまり注意が向けられなかったことを示しているのだろうか。それでも中国の読者は、多種多様な人間たちを知って、人間の多様性を考えるように仕向けられる。

これに対して、日本の古典を思い浮かべると、『平家物語』のような物語に眼が行く。そこでは、あざやかな場面で人間の個性が浮き出ることがあるが、できごとの移り行きを語ることが基調である。『史記』と違って、歴史は多角的に捉えられず、人間は成り行きに従い、徳や個性は付随的にしか語られない。現代では、吉川英治以来歴史上の人物を小説に書いたものがあり、主人公の言動はそれぞれの理由を付けて肯定的に語られることになる。それに感情移入して味わう読者の中には、そこから処世の術を学ぶ者も出る。西洋や中国のように人間の多面性を学ぶことが少ない、ということになるだろう。こういう複雑な思索だけからでも、和漢洋で人間の見方に差異が生じることが判る。自ら顧みてわ

かな徳と多くの不徳を知る者は、自他を見る眼を養うために、人間の複雑さを知り、人間の徳と不徳とを識別する必要があるだろう。

さて、政治家の評価にもどれば、日本では、事後に功罪を論じることが少なく、表だって施政の責任を問わない。ただ要職にあったことに敬意を払い、話題になったできごとに触れるだけで事をすませる。これでは政策を歴史に照らして検証することができない。それを、われわれの身についた文化のせいだと済ませていいだろうか。一回きりの歴史のできごとを追うのに、絵巻物の鑑賞のように一つ前の場面を隠してしまつては、次の事態を改善する方策は見いだせない。

映画「リトル・ダンサー」で、炭鉱労働者と警察隊とが対峙するシーンは主題の背景にある社会を映し出し、観る者は人間と社会を構造的にとらえることを学ぶ。そして、時の政治を主導していた首相をさえ想起する。思えば、イギリスの民衆はその立場を力強く主張し、「鉄の女」もそれから逃げないほど強かったのだ。人々は自己の考え方を失わず、できごとを成り行きとして忘れ去ることがない。現在のイギリスの状況は当時の政治とひとつながりのこととしてあり、サッチャー元首相の死は今と関係してさまざまな反響をひき起こさずにはいない。賛否両論の中で、反対派のあいだから「魔女は死んだ」という歌

がやはり、ヒット・チャートに登場する事態が生じた。イギリス紳士は中庸を重んじるから、BBCは葬儀の時期に悪趣味だとしてその音曲をショートカットし、その自粛がまた議論を呼んでBBC自体もニュースにのせた。日本では起こりそうにないイギリス社会の健全さを示すできごとである。

高名な人物、ことに政治にかかわり人々に作用を及ぼした人は、同時代人から毀誉褒貶の批評を受けることをまぬがれない。現代は多くの情報が伝わり記録される機会も多いので、名をなした人物の評判はしばらく高くても、やがて歴史に照らして結局落ち着くところに向かうだろう。情報操作に乗って権力を手にした現代政治家には、将来の評価を意識して行動を選んでほしいものである。思索家プルタルコスは、多くない資料から多面的な人物像に近づこうと励んだ。現代、名を上げた人はいつそう、そのような慧眼をのがれることはできない。いや、誰もが、一個の人間としてその徳と不徳を評価するプルタルコスの眼を忘れてはいけない。